

# 東アジア日本語教育・

## 日本文化研究学会報告

216

新羅大学院特別教授 藤井茂利

2002年8月26日での東アジア日本語教育・日本文化研究会での私の口頭による発表は終わった。口頭発表と言っても金

銀英がセツトしてくれているオンラインの画面に向かって話してゐるので会員達の反応は判らずに発表が本当に終わったのかと思つ感じでもあった。しかし現実には25年間続けた本学会での発表もこれで終わりになつた。

その後オンラインの調子が悪く電波が届かなくなり総会の議決の様子は韓国の事務局からの一場面、一場面ケイタイで静止画が送られてきたが会長は2002年3月31日で役を終えることが議決された。91歳の高齢であり体調も芳しくないとは言えず総会の議決は当然であると考えられた。次会長は西南学院大学名誉教授の中島和男副会長の昇格が決り、会は継続されることになった。

議決としては大変良い方向に感じられた。中島会員は本学会の2回目から発表されてい

る。学会設立の議論から現在までの学会の様子は郷土雑誌「博多のつわさ」誌(毎月一回発行)に2千字程度の拙文を(記事内容によつては2、3回に分けて継続)出して頂いている。(一回は00年11月号から開始)

毎月の拙文のタイトルは「東アジア日本語教育・日本文化研究会」

であるがこれに、  
—— 一般市民の参加自由の学会 ——

と言つサブタイトルを付けたがこれは一般市民の方から発表のご協力を期待して会長の独断で付したものである。

その折会長が「日韓交流博多会」(俗称ナドリクラブ)の三代目の会長役をしており、

市民の方々との交流が多かつた。或る会合の折りに「東アジア学会」の話になり早速発表希望者が2名現れた。

この会の設立の動機は1987年11月16日崔光準教授と私の2名であるが会が正式に設立されたのは'98年6月20日福岡大学の或る一室である。その折は院生を動員して会の設立は形の上では出来たが、実際は

これからの学会を日中韓の各国と共同して運用出来るのか心許ない状態であったが発表の申込者が、日本語学校講師、中学校教員、新聞記者、弁護士の方々からあった。

発表はしないが参加して色々の発表を聞きたく思つが参加は可能か、という質問が数多く寄せられた。学会が出来たばかりで今回が初めての会合で判断に迷つたが邪魔にならなればと思つて認めることにした。

先に申し込みのあった一般市民の他に更に2名の発表希望があり、聞かされた参加者、院生を入れ20名になった。最初学会を作ったものの発表者がいないと学会は立ち消えになると

を心配したが、それはとり越し苦労であった。学会は'98年10月31日から始まることになった。会長と行動を共にしたいといつ希望があり、同じナドリ倶楽部の会員でもあり行動を共にすることになり10月30日博多港17時発のフェリーで韓国に行くことになった。一泊は船中泊となり楽しい会になり

そつでであった。ところが発表者の何人かが明日の発表の練習をしたいので指導して欲しいと言ひ出し、止むを得ずそれに応じた。船中の私の個室で一名ずつ20分間の発表を2回聞いた。特に問題になる所はないように思われたが特殊な用語は使わな

いよう注意した。真夜中の12時までかゝつた。下船は翌朝の8時40分、大学のバスで会場校へ行く。

ソウルからのグループが会場に着き10月31日第一回第一回の「東アジア日本語教育・日本文化研究会」が始まった。ポスターに示している通り13時から16時まで、日本語教育・日本文化の二グループに分かれ

発表会、講演、その後懇親会で一日目が終わり、翌日9時〜12時、発表会をして終わった一般市民の参加があつて良かったと感じられた。

第二回目の学会は佐賀県唐津市にある近代図書館で行つた。韓国人で福岡までは往來する人は多いがせめて近くの唐津まで来て頂こうと考えたからである。一般市民4名の方が発表に加わつた。韓国から発表のための来日者は16名、日本の大学に職を持つ会員5名の25名で発表会、シンポジウムも初めて行つた。

第三回の学会は大連外国語学院でしたが一般市民の方は1名であった。発表者は28名。第六回の学会の記事から題目「一般市民の参加自由の学会」のサブタイトルを削除することにした。現実には合

わらないと感じたからである。その代わりの題目は「東アジア日本語教育・日本文化研究会報告」とした。05年9月号からそこでから数えて現在216号になっているが本号で結末としたい。